Tadasi MURAOKA*: Studies on an old document about buildings and gardens
of the Kikokutei Estate.

1

東本願寺の別邸として一般に枳殻邸の名で呼ばれている渉成園については、頼山陽が文政10年(1827)に作った「渉成園記」が広く世に知られており、従来の渉成園論はすべてこれを元としてなされていた。この園記において山陽は、先ず渉成園が寛永の増地によつて開設されそれが河原院荘の跡といわれていることを述べ、¹⁾ 殿舎は伏見城の旧構を移したものであり、園名は陶詞に由来することを明らかにし、つづいて園内の13景廻遊のさまを叙し、更に石川丈山がこの造営に参画し、かつ命名したことを記し、本園を柴桑にあつた淵明の住いとして論じ庭園の景観は変つても世々受けつがれた法燈と共に栄えて益々趣を成すであろうと謳つている。ここに述べられた山陽の見聞は概ね妥当であり、簡潔によく渉成園の沿革を伝え、当時の状況を偲ぶに価値の高い資料ではあるが、園記の性質上、もとより委細を尽したのではない。この外に古くは宝暦11年(1761)近衛閑白のお供で渉成園に遊んだ冷泉大納言為村卿の園記や、下つては光緒6年(明治13年・1880)秀妙陳曼寿という中国人の残した園記もあり、その間に渉成園13景を詠んだ詩歌は30篇近く数えられる。東本願寺大谷家文庫中にはこれら渉成園に関する直接間接の資料が数多く見出されるのであるが、その中「枳殻御殿古之記」と題した一本は本園に関する伝承を集めたものとして現在得られる最も詳細なる記録であり、まことに貴重な資料と思はれるので、ここにこれを紹介し、その内容を検討しつつ渉成園の創設・作者並びに13景などについての考察をすすめてみたい。

2

「枳殻御殿古之記」(以下古之記と略記する)には「東御殿並御庭申伝承り候心覚」という副題がついており、26項目にわたつての記載があるが、末尾に「此本書ハ田中宮門方ニ有之朱書入之本書ハ富井小膳方ニ有之何レモ作者不知」との書き入れがある。朱書入というのは本文の要所々々の行間や余白に更に説明を補うように朱筆にて書き込みがしてあるのを指すが、この朱書入の内容は、別に「枳殻御殿古実」と題する一書とほとんど同じで恐らく同一の原本より出たものであろう。「枳殻御殿古実」というのは、その後書きに、

* 京都大学農学部造園学研究室; Fac. Agr., Kyoto Univ.

大書院偶仙楼等久々御手入無之御破損所多候処御老中水野出羽守殿入来有之て惣容御修覆被仰付但御庭樹木植足並縮遠亭嗽枕居傍花閣等新規御手入有之と不相見様ニ取繕ひ被下様分て御沙汰有之候事

とあり、文政9年(1826)に時の作事方兼留主居であつた東本願寺の家臣、石原長直の記したもので、古之記の作られた年代も文中の人物名から考証してほぼ同じ頃とみて差支えない。以下、古之記の全文をあげて御参考に供したい。(のちの考察の便宜上、各項に通し番号をつけ、朱書入の部分は、繁を避けるため、別に収録することとした。)

枳殻御殿古之記

東御殿並御庭申伝承り候心覚

一、大書院惣建物之木柱ハ松之四方正面ニ而今時稀成木之由昔ハ御本坊御森ニ有之銘ハチャウと申事太閤も御成有之候間之由其後東泰院様御代ニ当御殿江被為引是並奥向所々此御代ニ御堂残木ニ而御普請被為有御隠居所ニ被遊右大書院欄間一枚板菊之彫物見事成物之由惣釘かくしハ地金□□□減金上赤銅□車

但シ安永八己亥年二月大書院御破損ニ付楽邦院様より御修覆被遊候節張付戸めくり候所ニ太閤年中之年号有之候事上檀之絵雪中竹ニ雀上之間雪中ニ梅山鳥筆者狩野縫殿介江被仰付 上檀之間十畳 上之間十五畳 中之間十九畳 下之間廿四畳 外ニ大床二畳 後御客間九畳 上ニ同中之間拾畳 右同下之間六畳 委ハ絵図奥ニ記ス (1)

一、御庭作者石川丈山則偶仙楼下六勿銘有之比類裏ニ直筆ニ而名印有 (2)

一、丈山直筆之顔色々有之候所己前御本坊へ段々上り候由と承り (3)

一、昔は偶仙楼之上ニ嗽枕居有之候物共申ス嗽枕居天井之裂ハ襤褸錦也

但シ朱之磨出しの□□ニ四方黒天鷲絨へりとり同襤褸縁薩摩杉すり出し金の化粧入筋絵ハ女茶摘之處筆者不知北東方縁御船之乗場平日ハ取置有西之間四畳半東之間三畳敷也 (4)

一、臥竜堂南中嶋之後ニ有建物二重屋根瓦本ふき丸柱四本前ニより掛り候喚鐘ハ前方山科へ参り只今掛り候鐘ハ御本坊ニ昔より御座候者也とそ此鐘集会所ニ御座候共又ハ御台所偶ニ御座候共承り

但シ縮遠亭ニ而御茶之時嗽枕居ニ而御待合之節抔此喚鐘うつ由共承り (5)

一、後南之小嶋松二本有内女松菟本ハ自然はゑニ而格別見事之由 (6)

一、同北東小嶋ニ九重石之塔有之人々融大臣之塚抔と申人^(有之カ)□□不明此塔ハ御庭己前より有之候而御庭出来候節此小嶋宇治之景を形取則右之塔をすへ候事かと (7)

一、縮遠亭二枚之襖杉之絵古法眼之由人々申事未明引手瓢箪図同所天井アンヘラ古渡リニて見事之由さん黒柿同所上り口竈土上之瓦唐瓦之由天明六年閏十月十三日藤波二位様初而御庭拝見被成右之瓦殊の外御賞徴被成候事脇の方ニぬり付候瓦之内西方寺と有之候銘未知 (8)

一、廻棹廊ハ古ヘ七条通高瀬^(昨カ)屋と申材木屋より献上仕候と承り

但シ真中ニ掛釘有是は己前御客様被為有候節抔金燈籠夜分掛り候事ぞと (9)

一、侵雪橋之東方石燈籠台石海石也穴所々に有之潮にてしやれ物 (10)

一、五松塙己前之松ハ殊之外大木ニ而見事成物のよし中古かれ只今有之候ハ形斗のよし (11)

一、傍花閣己前ハ御成節抔二王飴申候事と今三階御藏ニ有之由両方上り段之上ニ武者絵之額並二階天井ニ真中磁石縁十二支也筆者未知二階四疊半 (12)

一、臨池亭檣棚之襖銅かつき筆者未知上之間組子天井之間夕花彩色ニ而有之筆者山本探川右同所築山泉水ハ森川先祖拵差上候由 (13)

一、牡丹昌己前ハ牡丹斗有之花之時分ハ牡丹花之御按内申上来り候得共中頃牡丹たへ川那部掃部御庭方相動候節山萩植度由申上則被仰付夫より萩花御案内申上候今ハ萩畠と成る此所へ土筆出来之時ハ御慰ニ御按内申上候事 (14)

一、園林堂之組子天井殊之外結構成由今時難出来物と也己前御所様方御隠居被為成候節御内仏之間之由量敷十二疊敷敷 (15)

一、右同所之南今御湯殿前ニ有之候石手水鉢ハ四菩薩石と申し而石之四方ニ形有之前ニハ船小屋之脇ニ有之候処藤井相馬家老役之時分右之石拝借有之元来右之石なぶり候と崇り出来申事と前々より申触有之候処相馬拝借有て間も無く御役御免ニ付御庭へ返上園林堂之脇へ其後久々其儘ニ在之候処右手水鉢只今御座候処へ入用ニ付直し候処何事も崇りなしと承り候 (16)

一、臨池亭之東北之角ニ燈籠之家根有之大サ四尺四方裏表彫物見事之由音焼物之ことし去ル人当御庭にヒガキの燈籠と申銘燈籠有之由申古来ヒガキノ燈籠ト申ハ西国ニ有之日本ニ一対之物故有而老ッハ今町方ニ有之今一ツハ当御庭へ納り候事と申説承る未吟味 (17)

一、御庭附ニ赤キ手水杓二三本有之前方三階之御藏ニ大

たらい抔と一所ニ有之候物也と己前御成之節此杓手水鉢へ付る事と也 (18)

一、黄葉隠居僧伏見ニ竹庵と申庵ニ住居候処御園濟入魂ニて右竹庵へ御所様被為成候故其つてニて当御庭拝見有之右竹庵大書院前へ出ルと当御庭ハ南京之西湖写され候事と申候也奎御附被仰付候時分之由元竹庵僧ハ南京之仁ニ而其時分之噂ニハ南京ニ而余程身柄ニ而娘ハ后ニ被召出候得共竹庵ハ故障有て日本へ流罪之旨夫故南京事委存候なりと噂承る (19)

一、難波前大納言殿度々御入来ニ而御庭へ御出之節院之御所も当御庭を写され候得共当御庭之様成見事之石無之候ニ付当御庭ハ格別結構成と毎度御賞徴有之候事 (20)

一、今之御内仏間ハ楽邦院様被為成候後ニ立つ間也夫迄ハ大書院後桐之間ニ御内仏被為在候事 (21)

一、容膝亭御学文所ニ建 (22)

一、御寝所是被為成候後段々と御修履被為在候夫迄ハすゝきの間の次菊ニ柴垣絵之所ニ被為成事と (23)

一、大床之間襖張付共松之絵紅葉之絵惣金ニて結構成事ニ候得共襖張付絵くひ違有之一如様御代ニ御修履被為有候従事と並すゞしの御障子抔御好ニて 緞子張塗骨ノ障子ナトハ楽邦院様御好ニて被命付候事ト有之 合塗さん入子障子当御代に出来申候と也 (24)

一、宣如様琢如様常如様平日当御殿へ被為成其時分ハ大床之間御居間之旨 (25)

一、詩仙六枚 歌仙六枚
右偶仙楼之額近衛予楽院様御筆絵ハ未承真如様御代歟ニ被為遊候事と己前ハ当御藏ニ納り候処其後御本坊へ納り御客様度々請取来り候処楽邦院様被為成候間又御藏へ納り候事 (26)

3

涉成園の創設に關しては枳殻御殿古実の冒頭に、「東御殿 此御殿ハ明曆三丁酉年(1657)御成就也 但御影堂御成就前年也」とあり、古之記(1)にも同様の書き入れがある。これによつて東殿々舎の完成を明確に知りうるのであるが、涉成園そのものの計画は寛永18年(1641)6月20日、家光が東洞院以東土手町に至る六条七条の地を東本願寺に与えて寺域を拡張させてから程なく樹てられたものである。すなわち時の東本願寺門主宣如上人は当時なお一面の田野川原であつたこの地を寺内町として東洞院を伏見に通じて車道とし人々の移住するのをまつて区劃を定め町制を布くなど大いにその発展に努力したが、その間に方百間を劃して別業となし、承応2年(1653)12月法嗣琢如上人に職を譲つてことに隠退し東泰院と号した。これがすなわち涉成園で、東本願寺の真東にあるところから正式には東殿あるいは東園とよばれた。京都の町版地図の上にも慶安5年(承応元年)の「平

安城東西南北町並之図」にはじめて「東本願寺下屋敷」として本園があらわれている。

初期の東殿々舎が伏見城よりの移建であつたことは、これまで頼山陽の園記に「移豊臣太閤伏水旧構為殿榭」とあるのみであつたが、古之記(1)の記述は伏見遺構とする伝えの最も具体的な資料として注意さるべきである。更にこの項には「此御殿ノ根元ハ伏見桃山城内ヨリ御森へ被引候上此御地面ヘ一ヶ所ヲ被移候敷今一ヶ所ヲ烏丸下間屋敷江被引候ナリ但富嶋某申伝ナリ此仁ハ明暦ノ頃留主居役ナリ」との書き込みがあり、最初の建物は伏見より当時御森といわれていた本山御影堂の西の地に引移され、その内の一つが再び移されて東殿内に建てられたことを明らかにしている。また次段安永8年(1779)の修覆については、「大書院惣画工狩野山雪也然ル処安永八年二月御破損ニ付樂邦院様ヨリ御修覆被遊候処張付メクリノ裏ニ豊臣公時代役人宛ノ反古有之候事云々」との朱書入がある。

東殿はその後、幕末二度の火災によつて創建当初の建物はすべて失われ、今日では当時のよすがを偲ぶすべもないが、古之記の記された頃にはその全容を誇つていたのであり、文化・文政・天保のころは皇族・公卿・大名・家臣をはじめ、文人墨客の来訪した記録も多く残つており、庭園とあいまつて、その壮麗善美なる姿が賞でられていたのであつた。

4

涉成園の作者として石川丈山の名は既によく知られている。承応頃の丈山は年令的にいつでも作庭の指導は不自然ではないし、東本願寺を奨助した幕府のお目付役として参画が考えられる上、彼の隠棲した詩仙堂の10境並びに凹凸窠12景と涉成園13景とは中国的文人的な名称や選び方に相通ずるものが多く、また煎茶会⁶の三亭(三店)を創めたといわれる丈山の趣向が涉成園庭園建築の配置にもうかがわれることなどにより、その可能性は非常に濃い。

そこで今、丈山と東本願寺との結びつきを少しく考察すると、石川氏は代々徳川氏に仕えた家柄でもあり、彼もまた16才より33才まで家康の近習であつたし、家康の寵臣本多正信は彼の叔父に当り、しかも正信は、かつて石山本願寺に仕えた因縁で、本願寺の分割を家康に建言し、東本願寺の設立をうながした立役者でもあつた。この関係からも隠棲後の丈山が東本願寺門主との交渉をもつたことは当然のことと考えられよう。例えば「京師巡覧集」(延宝5年・1677年刊)巻之十五、一乗寺の項によると、同書の著者大愚が、東泰院(宣如)を介して丈山と識り合つたことがわかり、また宣如上人が丈山へ宛てた書状、あるいは丈山が本願寺坊官を通じて門主

にあてた書状も存して、両者の交際が極めて親密であつたことがうかがわれる。また丈山の手定になる「覆醤集」には、慶安3年(1650)9月16日、東本願寺の連枝屋敷であつた皆山亭(涉成園の南隣り)において、丈愚と共に観月の宴に招かれ、新門跡琢如上人と交した詩が載っている。更に大谷家文書中には「泥洹院常如石川丈山ト評定之定書」という11カ条からなる掟書の写しもあり、丈山が晩年に宣如・琢如・常如の三代にわたつて東門の覚えがあつたことがよく知られるのである。

古之記(2)(3)には丈山の遺品が多くあつたことを述べているが、江戸末期に枳殻邸にあつた「御道具控」「園林御懸物控」「三階蔵御懸物控」等の目録をみると丈山筆という軸や額が数多く所蔵されていたことがわかり、現在も書院には「閨風亭」並びに「嘉楽」の額がかゝつている。ことに後者は「六々山人八十一歳操筆」との落款があり、これが寛文3年(1663)の書であることがわかる。偶仙楼下六勿銘の額は、現在詩仙堂にあるものと同じで大谷家文書の写しによると裏に正保3年(1646)の年号があつた。これらの遺品はまた、丈山との関係の深さを裏付けるものに外ならない。

5

涉成園はまたその昔、嵯峨天皇の皇子左大臣源融が奥州塩釜の景を写したという東六条院、すなわち後の河原院の遺跡として有名である。これは涉成園創設後間もない頃から広く信じられていたようで、貞享元年(1684)北村季吟著「菟芸泥赴」(第二、東本願寺の項)及び同年黒川道祐著の「雍州府志」(巻二、神社門上塩釜明神の項)に既にそういう記事が見出されるのであるが、拾芥抄にある河原院の四至が涉成園の四至と合わないことなどから、今日では到底この説を認めることは出来ない。ところで世上、融の供養塔と称する印月池中島の石塔については全く触れていないが、これらは共に鎌倉時代のも¹⁰のと推定され、もとより河原院とは何の関係もない。ただこの伝えが多分に平安朝風の雰囲気を感じさせる本庭園の観賞に及した影響は無視することが出来ないと思う。

6

今日、涉成園13景と言われているのは、印月池・双梅檐・五松塙・紫藤岸・丹楓溪の諸景観、並びに漱枕居・縮遠亭・侵雪橋・回棹廊・臥竜堂・傍花閣・滴翠軒・偶仙樓の庭園建築等を指すが、安政5年(1858)の大火とつづいて元治元年(1864)の兵火によつて書院を始め建物はすべて焼失し、現在のものは慶応から明治年間に至

つての再建になるものである。そのうち偶仙楼と臥竜堂は復興するに至っていないが、漱枕居・縮遠亭・回棹廊・傍花閣はよく旧規を伝えて安政度の古図ともプランは全く変らず。古之記の記載と合致するところも多い。そしてまた古之記には数々の興味ある伝えを書き留めている。

先ず漱枕居について、これが元は偶仙楼の上にあつたと耳新しい伝えを記しているが、(4)にはこれを補足して、「偶仙楼ハ元来三階之處琢如様御代ニ三階ノ中一階ヲ御庭南ノ方へ被移当時ノ漱枕居是ナリ上田由誓申伝ナリ」との書込みがある。偶仙楼は書院の屋上にあつて庭園の眺望がよく、後世主として饗応の場所として利用された。臥竜堂は現在礎石を残すのみであるが、この礎石は(5)の記載とよく合い、炎上前の諸絵図に画かれている姿もまた古之記の通りである。縮遠亭で茶事の時、漱枕居を待合として臥竜堂の鐘を合図に舟にて池をわたつて席入りをしたことは(5)山陽の園記にも述べているところで、その構想は桂離宮や修学院上のお茶屋の舟遊と相通ずるものがある。

縮遠亭については、その構造が鹿苑寺の夕佳亭とよく似ていることが今までにも指摘されていたが、古之記(8)には、はつきりと、「縮遠亭ハ金閣寺足休亭茶席写ト云」との書き入れがある。(現在の夕佳亭の扁額は「即休」とある。) また回棹廊についても(9)に「廻棹廊ハ建仁寺正伝院ニ有之月見亭ヲ写サレ候歟因ニ月見亭ハ織田有楽斎好之由ナリ」との書き入れがある。現在正伝院には何物も残らず月見亭については不明であるが「都林泉名勝図会」の正伝院庭園図の一隅に、回棹廊と類似の唐破風のある廊橋様のものの一部が見えているのがそうであるかも知れない。回棹廊中央の亭にある掛釘は(9)今に伝えられ、傍花閣の仁王髹は(12)最近まであつたし、階段昇り口の敦盛・直実の額についても(伝永納筆)天井の十二支についても(伝丈山作)、「筆者未知」としているのは、融の塔の伝承を信じていないのと同様に、古之記の筆者の周到さがうかがわれる。

13景の一つである滴翠軒については本文中には記載がなく、(13)の書き入れに、「余境臨池亭喫茶居滴翠軒等後年森川保全寄附之由尤御庭泉水築山トモ同人ヨリ献上之由云々 但惣名臨池亭北之間ヲ滴翠軒ト云南之間ヲ喫茶居ト云」とあり、滴翠をも含めて臨池亭と名付けられていたことがわかるが、「枳殻御殿古実」にはこれを補つて、「但滴翠軒ハ此処ニ而ハ無之との説在之候へ共先年此御殿江閑白様被為入候時為村卿臨池トいふ所にわたり給ふ先月を得へき所なから雨になりぬ 霞より滴る水の音すみて 軒しつかなる池の春雨 喫茶にて僧正の手つから薄茶をたて 出さるゝも猶興あり したつる茶に浮ふも花の春深く かすめる湯気の色をみすらし」と

為村の涉成園記の一節を引用して「滴翠喫茶此処に治定ト恐察」と結んでいる。すなわち滴翠軒が13景中に数えられるようになったのは年代的に少し降つてからと考えられる。

以上のほかに、碧玉と名付けられている石燈籠のこと(10)、臨池亭の後庭のこと(14)、園林堂のこと(15)、その南にある四菩薩石の手水鉢のこと(16)、臨池亭東北隅の燈籠のこと(17)など現存のものについて参考となる記事が多い。

7

古之記には本園を西湖10景の意匠化とみた黄栗僧のあつたことを記しているが、その具体的な内容については(19)に次のような書き入れがある。

御庭指図万端石川丈山ハ被命付源氏乙女巻ノウチ四町ト云此土地ト有之則御庭地面二町四方ノ一分之景色ニ取り西湖十景ヲ像ルナリ 蘇堤春晚 五松塙 花港観魚 双梅檐 双峰挿雲 丹楓溪 三潭印月 印月池 南屏晚鐘 臥嗽枕居 柳浪聞鶯 園林堂 傍花閣 四院風荷 紫藤岸 縮遠亭 雪中西照 偶仙堂 断橋残雪 廻棹廊 平湖秋月 涉成園¹³⁾

涉成園13景はいわゆる丈山好みとして築造当初からの選定になるものとされているが、ここに対照されたものの中にも滴翠軒は入っていないし、為村の園記にも印月池・漱枕居・縮遠亭・侵雪橋・紫藤岸・丹楓溪・傍花閣・偶仙楼の歌が詠みこまれているだけで、余が宝暦の頃にすべて揃つていたかどうかは疑問である。13景を詠んだ詩歌は多いが文化10年(1813)をさかのぼるものはない。それ以前のもの、例えば「都名所図絵」(安永9年・1780)や「都林泉名勝図会」(寛政11年・1799)などにも13景に関する記載は見当たらない。すなわち13景が現在のように定まるまでには多少の曲折と時代を経たものとみるのが妥当であろう。

註

- 1) 陶淵明「帰去来辞」中の一節「園日=涉ヲ以テ成レ趣ヲ」よりとつたもの。
- 2) 玄如堂、天明7年(1787)1月朔。
- 3) 宝暦4年(1754)楽邦院方詰及び東殿勝手方をつとめ安永5年(1776)御庭方御免となつている川那部將曹のことであろう。
- 4) 藤井家で相馬と名のり家老役をつとめた人には宝永6年(1709)になつた盛亮と、元文5年(1740)になつた盛住とがある。
- 5) 森蘊氏「東本願寺別業涉成園について」大和文華第8号(昭27.12)
- 6) 上原芳太郎氏「准如上人芳蹟考」(昭4・4)

- 7) 京都国立博物館々長、神田喜一郎博士の御示教による。(同氏所蔵)
- 8) 京都市、河根義之氏所蔵
- 9) 田中義一氏「源融公河原院の遺址に就いて——特に涉成園との関係に及ぶ」史迹と美術 112・113号(昭15・3~4)
吉川需氏「河原院庭園に就て」造園雑誌第13巻第2号(昭25・3)
- 10) 川勝政太郎氏「涉成園の宝塔水鉢」林泉第27号(昭12・3) 同氏「石造美術と京都」(昭21・5)
- 11) 12) 拙稿「東本願寺涉成園調査報告」(昭29・6)

本報告書は東本願寺の依頼により、沿革(河原院址と涉成園・創設・作者について・幕末に於ける殿舎の類焼と復興・庭園、建築とその変遷)並びに現状についてとりまとめたものであるが、未公開であるので、その後の調べを加えて「枳殻御殿古之記」に関する部分をここに、古図・古絵図に関する部分を次に発表させていただきますと思う。

- 13) 西湖10景中、蘇隄春晚は「春曉」南屏晚鐘は「晚鐘」四院風荷は「曲院」雪中西照は「雷峯」が正しく、この誤りは「枳殻御殿古実」の記載と共通している。

Recreation Area における人々の集合離散に関する研究 I

U.D.C 712. 3.001

——片瀬江の島海水浴場調査の解析

鈴木 忠 義*

Tadayosi Suzuki* : Trip to and Stay in the Recteation
Area of Katase-Enosima Bathing Beach

I ま え が き	II 調 査 方 法	III 調 査 結 果
IV 考 察 I	V 考 察 II	VI 摘 要

I まえがき

この研究の目的は recreation area における、施設内容の決定とその規模の算定の基礎的資料を得ることにある。ここでは片瀬、江の島海水浴場をとりあげ、1952~1955の毎年、夏の盛も混雑する日を選んで行われた調査の結果にもとづく考察を報告する。これらの調査は小田急電鉄株式会社と江の島鎌倉観光株式会社(旧江の島電鉄)の合同により行われたものである。筆者は調査日の見学、現地調査、資料の提供などについて江の島鎌倉観光社長梶浦浩二郎氏に多大のお世話をいただいた。ここに心からお礼を申し上げる。

II 調査方法

1. 調査の対象となった地区 片瀬西浜、江の島、及び腰越の海水浴場
2. 調査日 1952年8月3日 1953年8月9日 1954年8月1日 1955年7月31日(何れも日曜日、晴天)
3. 調査方法 この地区に流入してくる海水浴場利用

* 東京大学農学部造園学教室; Lab. Landscape
Architectur, Fac. Agr., Tokyo Univ.

者(鉄道と自動車の利用者のみ)をその周辺10ヶ所で計数する。鉄道関係は各調査地点における改集札口通過の実人員を計数した。自動車関係は調査地点を通過する車輛数、出入別、車種別、出発都県別を、1時間を単位として計数し、その乗車人員は通過除行の際目算によつて計数した。各調査所には2~6人を配置した。

4. 調査地点(図一)参照 小田急線藤沢駅(国鉄、

図一